

宮崎夢柳「自由の凱歌」の言説戦略

西田谷 洋

1 言説戦略研究の意義

ピロウ、ギルベルト等が「専制主義に打ち勝つて自由の凱歌（カチミカ）を揚げ」(42)る過程を描く宮崎夢柳「自由の凱歌」(『自由新聞』一八八二・八・一二―八三・二・八)は、それに向けて様々な言説が組織化される物語と言えよう。

本稿で言う言説は、語り手・書き手等の送り手が、聞き手・読み手である受け手に向けて発する談話・発話のことである。つまり、本稿は、送り手が受け手に向けて行う意図明示的伝達として物語テクストを捉えている。言説は、送り手・受け手が共有するコードによって解読されるのではなく、文脈その他の背景的情報を主体的に駆使し有契的に意味づける推論によって、理解される。拙稿「言説はいかに理解されるか」(『漱石研究』一九九七・五)では、関連性理論に依拠しつつ、ポスト構造主義言語観への認知的言語観の優位性を論証し、推論解釈による伝達では隠喩等のレトリックが不可分の関係にあると指摘した。また、拙稿「明治初期政治小説の時制をめぐって」(『日本文学』一九九七・五)では、語り手の認知的言語運用として物語を捉え、語り手が現在の視点から事象・出来事をいかに図式化し見立てるかという事象認知・虚構制作過程の一環として相・時制が構造化されていることを明らかにした。

これまで、送り手の心的イメージ・図式によって動機づけられた言語運用として物語を捉える認知的な立場から、物語論の再検討を進めてきたが、本稿では、物語世界内外での具体的な言説戦略を対象とする。言説戦略とは、言説のやり取りの中で目的を達成するために送り手が用いる手段である。いわば、認知というハードの上で稼働する、伝達のされ方というソフトの一つである言説戦略を考えてみようということである。

この言説戦略の分析は、自然かつ自明に日常的に行われている会話を相互達成行為として捉えて実用的な方法を見いだ

したエスノメソドロジの会話分析にも着想を得ている。エスノメソドロジの考え方では、「話は、社会的組織の場であり、社会的組織を共謀するものであり、達成させ」る。また、「実際の出来事は、そのまま事実になるのではない。出来事をカテゴリー化する適切な手続きを用いることによって、実際の出来事は事実へと変換されるのである。(略)あることを一つの事実として記述したり、取り扱ったりすることは、出来事それ自体が、物語の語り手を権威づけして、当のカテゴリー化を不可避のものとして扱うよう強制している」ことを意味する。言い換えれば、人々が社会に敵として存在すると思っている現実とは、人々の会話等の相互作用・行為の過程で様々に用いられる方法を通して経験され想像される達成産物である。言説戦略は、言語運用によってそのような現実を作り上げる方略の一つでもある。

本稿は、言説戦略の分析のため、いかに言説が修辭的に運用され、コミュニケーションが遂行されていくかを検討する。同時代でも、菊池大麓『修辭及華文』(文部省一八七九・五)の一節に「修辭ハ(略)汎ク文章ノ意味情趣並ニ聴納者ヲ感移スルニ関スル全結果ヲ論スル者ナリ」と定義される如く、伝達と修辭とは結びつけられている。明治初期は、江戸文学以来の文彩としての修辭を継承しつつ、弁論・演説のための西洋修辭学の導入が試みられた時期である。さらに、演説では、意味の伝達の正確度だけではなく、意図された目的の達成が重要となる。換言すれば、明治初期は、意図を伝える人を動かすための言語運用が問題化された時代でもある。従来、「読本の修辭」として自明視されてきた「自由の凱歌」のレトリックは、明治初期における物語伝達を考える上で重要な意味を持つように思われる。そこで、最初に語りの構造を提示し、次に演説の修辭学の同時代的動向を視野に入れて物語世界内の演説の分析を行い、現行テキストの結末部を論じる。演説を取り上げるのは、それが自由民権期の代表的メディアであるからだけではない。伝達における合意形成の成功と失敗が最も見やすく、「自由の凱歌」のストーリー展開において重要な役割を担っているからである。

二 語りの構造と枠組

「自由の凱歌」の語りで最も目に付くのは、物語世界外の送り手、特に書き手が本文中に何度も顔を出すことだろう。たとえば、各回冒頭・末尾部の「再説」(5)・「復説」(14)・「例に依つて次回に説くべし」(15)等の物語世界外の語り手が物語を再開・中断する際の類型的表現や、「看官宜しく察し給へ」(9)・「次回の紙上に分教なん」(22)等の書き手が物語

を中断する際の表現がそれである。物語世界外の語り手・書き手（Ⅱ送り手）が現れる度に、聴き手・読み手（Ⅱ受け手）は物語世界内の場面から離れ、物語の叙述・進行に関わる情報を知らされる。回末・回頭の送り手である書き手は、物語世界と「看官」との間に位置している。読者は、物語への関わり方を書き手によって補助・規制される。

夢柳曰く本編は原依国（もとよこくに）の学士デュマ氏が彼の大革命に際し世に名高き破獄一件を綴りしテーキングジーバスチールと題せるものにして弊社の百華園主人が既に掲載半なる医者の記録（西の洋血潮の暴風）に連続せる稗史を意識せしなり此頃百華園主人は病魔の圧制を受け久しく筆硯の自由を失したれども不日必らず回復を得て続々其の次章を登録すべければ看官願くは彼此相参照せられんことを（一）

第一回末に顕在化された意識者「夢柳」は、「自由の凱歌」の意義や位置づけ等を読者に伝える。デュマの原作の第一次読者である意識者は、「自由の凱歌」を読むための枠組を読者に教育する言葉や物語の始発にあたり配置している。一方、「自由の凱歌」が連載小説である以上、ある挿話がいつの「回」の「紙上」に「分教」されるかが書き手の構成上の問題となる。ストーリー展開への書き手の説明は、回末の場合は予告となり、場面の後の叙述の場合には原因・起源の開示となる。

畢竟此のギルベルトが所持なす手箱の何故に斯く緊要なるか未だ詳らかならねど是は一編中の核子（がいし）なれば其結局に至りて自づから瞭然たるべし看官請ふ其の意を諒せられんことを且つ次回より女王宮中の話頭に転換らん（62）

ギルベルトに頼まれてピロウが保管していた「手箱」は、ギルベルトの逮捕の数日後に憲兵に押収される。「手箱」を奪われたピロウは、ギルベルトに報告しようとしてパリに向かい、バスチール奪取の蜂起に参加する。ギルベルトは、解放後にピロウから「手箱」の強奪を聞き、逮捕が前宰相ネツカーの命令書のせいだったことを知る。ギルベルトは、ネツカーの紹介によって国王ルイ十六世に謁見し、逮捕・押収が以前犯したチャーニー夫人アンドレーに依頼されたことを知り、「手箱」を取り戻す。「手箱」の行方とその探案は、物語言説の三分の二である第六二回までを繋ぐ事件連鎖を構成する。六二回末の書き手の言葉は、「手箱」の中身が物語の「核子」であり、物語の結末で重要な意味を持つことを予告している。

また、時間表現面で、物語世界と読者を繋ぐ送り手の位置が示される場合もある。

バスチールへ行け獄屋へ行けと皆口々に号呼ながら隊伍を組んでヒロウ共々早彼方をさして進行せしは是れぞ仏蘭西の破獄事件の起
源なりと後にぞ思ひ合はされたり(17)

ヒロウ万歳吾党万歳と轟くまでに唱えあげしは是れぞ此の国圧制の政府の威権と並び立ち非常の勢力を有したるバスチールの監獄へ
細目を受けぬ人民の青天白日公然と義に仗り自由に基きて入込たりし魁けとヒロウの美名は後の世まで祝賀の聲に聞えなれ(31)

これらは、物語世界内の出来事を「是れ」と指示し、その事件を過去化する。「後の世」の状況を補足する。出来事は、前者では「思ひ合はされ」て語り手の内面に言語化され、後者では「声」を「聞」く聴覚で指示対象が得られる。現実世界には存在しない出来事である。「是れ」の指示対象を、内的であれ外的であれ既存の言説世界の再言語化という方法で、語り手は言及する。「フーロン(略)老婆の爲めに其名を知られたりとかや」(85)・「カーザム候が絶命の言葉にて議院を退りし間もなく忽ち現世を見捨てしとぞ」(96)等、この物語に散在する伝聞の文末はそれと同種の方法である。ともあれ、一七・三一回の引用部分の語り手は、「後の世」と同時かそれ以降の時間に存在すると言えよう。つまり、物語世界を過去のものとし、「後の世」以後の物語世界外を現在時としている。⁶⁾

物語世界内と読者を繋ぐ書き手は物語の展開を見越しているのだが、その全知的な視点で全ての物語言説が統括されていたわけではない。回末の構成的な言葉の場合、それが一回が断続的に存在し、特に二四―四一、六三―七一回には全く現れない。また、ある人物の内面を語りながら、別の人物のそれを語れない場合もある。

カセイリンの後の方誰れとも知らず声かけて俟ねくと呼ぶを聞き手綱扣へし其ところへ思ひかけなきアンジピトウ(7)

ヒロウは只だ独り快よからぬ面色なしギルベルトに尋ぬる(略)不平不満の言葉にギルベルトは困じ果て正直質朴のヒロウなれば迂闊に返答へ彼れが怒りを惹き起しては悪しかるべし如かず和め論さんにはと急に顔を和らげて(81)

カセイリンやギルベルトへの内的焦点化は、ヒロウやピトウに対しては外的焦点化となる。焦点化ゼロの物語言説とは、

内的焦点化の小切片と外的焦点化の小切片の混交である。これらのケースでは、語り手は登場人物が見聞していることをイメージして物語っている。そこに、語りによる枠組化の力が作用する。物語世界内の場面に感情的に寄り添い感想を付す語り手は、それが顕示化されたものである。

不平の情に堪兼狂ひ出せし老若男女然也（さかなくる）と声をかけ瞬間一千余人剣を携へ銃を担ひ公園内へと会合せしは実にも壮快なる挙動（よるぎん）
ならずや（11）

ここでは、語り手は、カミルデモルランの演説で触発された民衆蜂起を「壮快」な運動として称える行為を受け手と共有しようとしている。

知識を伝え、共感を求め、推測することで、語り手は、物語伝達の枠組（フレーム）を形作っていると見えよう。また、「虎狼に斉しき暴民激徒」(48)等の比喩や、「ダロニーが頭は其処に転がりて瞬く間息絶たるは無惨と云ふも憐れなり」(48)等の評価・感慨付けは、語り手が、受容者との間に合意を形成するための方略である。

物語には、伝達内容に関する送り手の態度やその伝達に際しての送り手、受け手の社会的な役割に関わる対人関係機能がある。特に日本語は、判断・表現主体の主観的側面が高度に文法化された言語であり、発話の参加者の社会関係や伝達態度の反映であるモダリティを基軸とする叙法として対人関係機能が構造化される。言説は、発話態度を通じて指示対象としての出来事と結びつけられる。発話態度は、伝達における送り手側の枠組を構成する、物語言説の自己言及的な要素の一つである。

メタコミュニケーションを特徴づける枠組を送り手・受け手が設定・推測するのが、枠取り（フレームング）である。枠取りは「自分や他人の言動の真意・意図を、伝達または解釈するための一方法」であり、メタメッセージという枠組の中で全てのメッセージが伝達・解釈される。話された言説がその発話態度とともに、各言説を枠取りしていき、個々の小さな枠組を、さらに状況全体を規定する大きな枠組を、反映し構築する。換言すれば、言説に関わる全てが発話者と受容者の関係を枠取りする材料になる。さらに、枠組に言及して伝達のあり方を指示するメタコミュニケーションや、枠組自体の変更を行うリフレーミングについても考察するタネンの仕事は、日常的言語運用で枠組の顕在化によって伝達の成功が導かれる

事例の検討である。粹組の顕在化は、反コミュニケーションのみ奉仕するのではない。その一つの事例として、「自由の凱歌」の中絶部分を見てみよう。

ピトウは今更ギルベルトピロウの両個に別れんこと忍び難なき、心惜なれど事を分けたる其頼み且つは又我が為めには行末をも料りたる恵みに之れを固辞み兼然らば教えに随ひて彼の地へ別れ奉つらん汝必ず健全に渡り給へと暇を乞ふ言葉も自づと涙声是れが或ひは永訣とならんも今の世の中には定め渚の群千鳥友に離れて只だ独り遠く飛び去る悲哀の心啼かじとすれど溢れ来る涙に誠実現れたり

(99)

ギルベルトとピロウは、革命に挺身すべく家族や次代の闘争等の後事をピロウに託する。ピトウは、二人の言説を依頼・恩恵の発語内行爲として受取り、発語媒介行爲としての「永訣」を「涙声」で言語化する。ピトウの胸には「悲哀の心」が満ち、「誠実」を込めた言説によって意志が伝えられていく。

ここで、ピトウの「誠実」が語られるのは何故か。「自由の凱歌」が、「解説的な注釈文を組み込み込み革命に至るを然性を持たそうとしている」ように、この「誠実」にも粹組を作る機能がある。「自由の凱歌」の物語言説は、修辭的に二項対立によってカテゴリー化されている。つまり、フレツセルの「式心」(23)、政府官僚等の「阿諛諂佞」(63)に、ピロウの「正直質朴」(81)やギルベルトの「丹心」(58)が対置される。路易第十六世・マリアントハネットに対して、政府官吏が「媚び諂ら」(75)うのに対し、ギルベルトは、「誠心」(76)から「忌み憚らぬ直言」(78)をする。この物語では、虚偽・追従的な言説と誠実・素朴な言説とが対立する。追従とは、上位者への儀礼・敬意を装いつつ事実を隠蔽し、利己的な欲望を実現するための二重的言説である。現政府は、「直言讜議を忌み嫌ひ忠義の人を退け」(59)る。虚偽・利己的な言説が「国王と人民との間に一つの城壁」(76)を構成する。一方、ギルベルト等の誠心は、「天地に対し今古に向ひ不易不變の道理」(54)と結合する。発話態度の誠心と発話内容の道理とが一体化した直言は、压制政府の虚偽・儀禮的な言語障壁を破壊し、自由民権伸張をめざそうとする。「自由の凱歌」の二元論的な物語言説は、ギルベルト等革命党穩健指導者の言説を誠心・道理として特権化し、その伝達が聞き手の専制体制変革行動への契機となるよう、粹組が作られている。

また、同時代の雄弁法、つまり演説の修辭学では、言葉の重要性は意志の伝達だけではなく、人を感激させることにある。

ると考えられていた。⁽¹²⁾

言語ノ要ハ決シテ意ヲ通スルノミニ止マラサルナリ言語ハ人ヲ感激セシムルヲ要スルナリ若シ夫レ人ヲ説キ人ヲ誨ヘ人ヲ諫ムルカ如キニ在リテ之ヲ感激セシムルニ非ラザレバ決シテ目的ヲ達スルコト能ハズ(黒岩大『雄弁美辞法』輿論社一八八二・三)

演説モ誠心ノ中ニ充実スルニ非サレハ何ソ一國ノ人心ヲ振起スルヲ得ンヤ(末広鉄腸『雄弁美辞法序』)

新聞と演説という自由民権期の二大言論メディアの中で、「直接ニ人心ヲ振起セシハ演説」(三宅虎太『日本演説軌範』山
中喜太郎一八八一・一〇)の方である。演説で人を説得し諫めるためには、感動させなければ効果は望めない。特に「東
洋諸邦に於ては悲憤慷慨の言、人に感を与ふる多」(尾崎行雄『公会演説法』丸屋善七・一八七七・一一)く、「悲哀」が強
調されやすい。感動を効果的に作り出すためには、言葉に「誠心」を込めて真情に訴えることが要請されよう。「自由の
凱歌」に先行する桜田百華園「西の洋血潮の小暴風」(『自由新聞』一八八二・六・二五)一・一六)にも、「雄弁もて。
赤腸(まこと)の限り吐露しければ、左なきだに国事の為には、狂と呼ばれし會員も。又今さらに胸を感動(うごか)し」(6)という一節がある。
そして、言説の技術としての修辞だけでなく、伝達内容としての「思想」(『雄弁美辞法』)、半ば伝達態度を含んだ「誠心」
が、伝達の達成と合意形成による行動へ人を導くためには必要である。雄弁大家の条件に「学識(ガク)天資(テンシ)演説術(エンゲツジュツ)ノ三者」(西村
玄道『西洋討論軌範』波多野重太郎一八八一・五)を挙げる見解も、伝達内容・態度・技術の重視という点で、これに呼
応しよう。「自由の凱歌」での、ピトウ、ヒロウ、ギルベルトらの誠実への言及も、演説において発話者の誠実を求める
同時代言語状況と対応している。

これには、一八七九年末から八二年夏にかけて、演説会が全国的盛況を見せ、自由民権運動の主要な活動形態となつて
いた背景がある。演説会には、民権思想を余り理解していない民衆が多く参加し、専制政府批判の激しい言説パターンが
成立し、解散権限を持った臨時警官との間に緊張関係が作り出される等の特徴があった。⁽¹³⁾このような演説会盛行に関して、
稲田氏は演劇性、新奇性、構成要素としての参加者という三つの理由を挙げている。演説会では、有料の公開娯楽として
演説の巧みさや専制権力と民権派との二元的対抗というパフォーマンスが求められた。また、主語を確定し自説を論理的
に筋立てて主張し、問題を特定し焦点を当て正否を明確化し、禁止・否定形での断定を用いるという演説の様式は、それ

までの日常的・伝統的な高文脈依存社会の言説様式とは異質である。そして、演説会は会場全体として意志を形成する場であり、聴衆に政治への参加意識と緊張感を作り出した。¹⁵⁾

演説が聞き手を志向する共同行為であることは論を待たない。ここでは、革命も一つの対象として言語上に組織される。「自由の凱歌」における演説も、言語行為として、伝達内容のみならず、演説の構成・発話順序や、それが発話される情況・文脈への注視が必要となるはずだ。そこで、次節では、演説の中でいかに民衆蜂起が正当化されたのが課題となる。その中から、よき革命と悪しき暴動という運動の弁別という問題が浮かび上がってくる。そこには、革命を正当化せんとする演説の、そして語りのレトリックの力が見えてくるはずだ。

三 演説の修辞と行為誘発力

まず、検討すべきは、演説の中で、革命が必要かつ実現可能なものへといかに構成されていくかである。それは、事象把握と説得のための言葉の組立という議論とも関わるだろう。民衆を決起に導いたカミルデモランの演説から見てみたい。

a 悲壯活発なる面色して短銃持ちし手を揮り揚げ滔々たる雄弁水の流る、如く

吾儕国民が頼みと為せし宰相のネツカーも己に政府を退き跡に残るは尽く暴虐無道の奴原のみ今日よりは猶威権もて益々吾儕の自由を妨げ性命までも害ふに至りなん其をb吾儕は甘んずべきか仮初にも同等の権利を稟けて人間と此世に生れ出しものc争で他人に压制され束縛さるることやあるべき彼れ既に天地の公道に背きたり吾儕は兵器を執り腕力に訴へ彼れの罪科を糺すべし此の期に及んでd有子な為そ

とe威丈高になつて述べれば左なきだにf年頃日頃政治の苛酷を憤り居たるが上昨日宰相の免職からいよ／＼不平の情に堪兼狂ひ出せし老若男女(12)

蜂起は、カミルデモランの演説だけではなく、日常的不満・ネツカー罷免という背景的事情(f)との相乗作用で発生する。武装決起という結論が予め存在したわけではなく、演説者と聴衆の前には政府に民生の擁護者が存在しなくなった

という事実のみがあることに注意したい。カミルデモルランは、苛政の強化を予測し、「同等の権利」の存在という「天地の公道」を根拠に圧制政府を拒否する。想定された苛政は、「天地の公道」に反する事象として括られ、実力で処罰を遂行することを正当化する。そして、猶予を禁止するdは、実力行使の呼びかけを含蓄する。聞き手にとってここでは、問題解決のために実力行使が不可避であるかのような枠組を作る言説戦略が演説の中で遂行されていく。「吾儕」という一人称複数形や、反語の使用は、それとは無関係ではあるまい。例えば、「吾儕」は、話し手と周囲の聞き手を含んだ集団であり、聞き手と話し手との連帯を支え、決起に至る見解が両者で一致しているかの如く仮構する。また、b・cでの疑問・反語は、「故らに疑辭を設くる者なれば、其外貌は疑問なれども其精神は尋常断決言語を下すより却て確然たり」という「故疑」(『統公会演説法』丸屋善七一八七九・九)に該当し、不平等な支配体制への拒絶を強調する。さらに、a・eでの感情過多なカミルデモルランの表情・態度は、「直接ニ事物ノ形状ヲ明ニシ其事ニ就キ自己ノ感情ヲ明示スル(略)方法ヲ用ルトキハ尤モ激烈ナル言語を用弁弁士自ラ熱心ニ其感情アル処ヲ示シ聴衆ヲシテ自己ト共ニ同様ノ感情ヲ起」(『馬場辰猪』『雄弁法』朝野新聞社一八八五・八)せるパフォーマンスと言えよう。論理展開と、演説の一人称代名詞、反語・疑問等の強調表現、表情等によって、武装蜂起が自然な行動だと判断できるようなコンテクストが、演説者と聴衆との間で作り出される。

こうした言説の特徴と行為誘発力は、以下のピロウの言説でも反復される。ただし、聴衆は常に発話者に賛意を示してくれるわけではない。自己の見解に反対する聴衆に対して、いかにして合意を形成し行動に移らせるかが発話者の課題となるだろう。そこで、バスチール奪取に際して制止(g)から決起(o)へと人々を動かした、ピロウの言説の説得力を以下で検証しよう。念のため言えば、決起に「立到りしは固より一朝一夕のことにあらず」(18)として、語り手は、バスチールを「人民益すく之れを悪み厭ふ」(21)に至る歴史を叙述する。しかし、背景的不満だけが原因ならば、ピロウの当初の決意表明の時点で人々はそれに賛同したはずである。やはり、ピロウの言説戦略が重要である。

g人々が笑ひながら推し止め(略)其は俗に云ふ蟠螂が車に逆ひ臂を張る所業に奇しきことにぞある一つなき命を落とし給ふな
と云はれてピロウは怒りの面色人々を睨みつけ

h我れ義の爲めに死を決しバスチールを破らんに仮令ひ石壁鉄柵なりとて何どて破れぬことやあらん汝達はまだ知らずや彼のギル

ベルトと云へる人は先きに亜米利加へ渡航なしワシントン、ラフエツト、等の勇壯義烈を助けつつその國をして英吉利斯の羈絆を脱し独立の旗揚げせしめ幾年の長の月日の攻め守り戦ひ勝つて世の中に肩を比ぶるものぞなき共和同治の自由國千古未曾有の功業を建てたるのみか仏蘭西の此の國民に天稟の権力を全ふせしめんと力を尽し身を勞せしが「運拙くして圧制の政府に詔ふ官吏等に忌み憚られ繰の難難辛苦もk國の爲め世の爲めなりとパスチールの獄屋へゆきし「吾儕の師友恩人を汝達は救ひ出だすの心なく他人のことと捨て置くこそm卑屈なれ無氣力なれ人口多く土地広き此仏蘭西に我れを援けギルベルトを窮厄の中に助くる一人のn義人烈士はあらざるかと慨然として説き出せし容貌言語を見聞くo人々(略)拳を握り齒を切ばり老若男女の差別なく(略)パスチールの獄屋を破れギル

ベルトを奪ひ返せと異口同音に叫び合ふ(17)

gでの人々の制止は、⁹⁸へ目的も達成できずに死ぬだけだ⁹⁹を含意する。一方、ピロウは、反語hの含意¹⁰⁰へ義のために命を捨てるならば必ず目的を達成できる¹⁰¹という枠組を、この場に与えて¹⁰²を否定する。さらに、iは問いかけの形式によつて、話し手「我れ」と聞き手「汝達」を一端切り離し、この後に伝えられる情報に客観的意義を与える。また、ギルベルトの逮捕は単なる不運(j)として捉えられており、偶然の結果というニュアンスを持つ。ギルベルトの米仏革命運動への挺身は、国家・社会に有用な行為(k)であり、ギルベルトは「吾儕の師友恩人」である。しかも、一人称複数形「吾儕」は、ギルベルトの行動がギルベルト個人ではなく、ピロウや聴衆を含んだ「吾儕」のためのものであることを、強く訴えるだろう。命題¹⁰³は、ギルベルトが従事する運動の未来の勝利を示唆する。ゆえに、実現可能な変革を支援しない者是否定(m)され、聴衆に運動への参加を求める。このとき、nは、「故疑」とともに、「一物ノ名、性質、及ヒ作用ヲ直ニ他物ニ付シ以テ兩者ノ類似ヲ示ス」暗喩である。「比喩法」(『雄弁美辞法』)を用いている。「故疑」は¹⁰⁴へ義人烈士は存在する¹⁰⁵を含意し、「比喩法」は¹⁰⁶へ聞き手は義人烈士である¹⁰⁷という隠喩によつて聴衆を義人烈士のカテゴリに囲い込む。ピロウの言説では、変革の論理である命題¹⁰⁸は、義人烈士としての聞き手を遂行主体とする枠組によつて、妥当性を持つものとして伝えられる。

決起を促す演説は聴衆によつて承認され、実力で敵を打倒することが正当性を帯びる。演説の場合全体で、民権の伸張のために自己を善・正に位置づけ政府を悪・不正と見なして排除・消去することは必然であるという大きな物語が紡ぎだされていく。前宰相フーロン、ベルチエーが逮捕される直前にピロウが行った演説¹⁰⁹でも、この共同の戦略は踏襲されている。

吾儕は猶同じ人間に生れ同じ権利を有てるものに不当にも吾儕を支配すべき名称を冒すを許し置きたり(略)人々よ進めく進んで
 圧制束縛の基なる不当の名称を取り返し給え(略)と慷慨激烈三時あまり倦む色もなき演説に人々は覚へず知らず然也く異口同音
 掌を拍つて賞賛し暫しは鳴りも止まざりける(88)

「自由の凱歌」における演説の場合は、発話者の主体的な意志による革命推進と、聴衆の集合意志による興奮・蜂起とに満ちていた。聴衆の反応が「感觸なしたりけん(17)・「覚へず知らず(88)」と論理的ではないことに注意しておきたい。その点で、演説の枠組・戦略が作り出すパフォーマンスタ性は、非論理的なレベルで聴衆の興味を十分に満たすものであった。ところで、今まで見た演説は静的な聴衆の激化、連帯感の維持には成功した。その点で、「自由の凱歌」の物語世界で聴衆の鎮静化を意図することは、逆に演説者にとって自己とは異質な聞き手の存在を改めて注視することに他ならない。演説によって、聴衆を蜂起させ自説への賞賛を得たピロウは、演説が一つの力であることを知っていたはずだ。道理を担う革命家という自己認識の上で、それとは異質な他者として聞き手を捉えたとき、聴衆は道理を喪失した暴動集団としてカテゴリー化されよう。問題は、いかなる演説の修辭が合意形成を失敗に導いたかである。以下はベルチエーを救おうとしたピロウの言説のレトリックが瓦解していく過程の検証である。

人々よ吾儕わがらは固よりP此の国の圧制政府を転覆し真理自由を回復せんと熱心希望したればこそ第一にバスターールの監獄を乗取つてグロニグロスムを殺せしなれQ然れど是はグロニー等が剛愎執拗監獄を吾儕に渡さざりし止むを得ざるに出しことにて吾儕は只管ただに人を殺し血を灑ぐを快よしとするものならずR飽までも平和をもて革命を成就せんと願ふが吾儕の本意なるにS人々は今宛ながら狂癡の景況を現はし残忍にも已に輻輳籠くわうくわう鳥弱り果たるフーロンを縊り殺せし其上にベルチエーをも亦殺さんと斯く騒がしくトラフエツト、ベイリ、等の言葉さへ聞き入れざるは何事ぞ如何に活発壯快を吾儕は好むとは云へり余りに急激過激なる挙動しては愛すべく貰ふべきの革命の名を汚さんも料り難かり人々よVベルチエーは実には天下に容れぬ大逆無道の人なれど自から之れを所刑せずラフエツト、ベイリ、等の言葉に任せ充分に罪状を吟味せし後至当の処分を為し給へ残忍に縊り殺すは吾儕の本意なるまじ
 黙れピロウ汝何故逆賊を斯く身を捨てて庇保し給ふか片腹痛き業にぞある(93)

Pは、革命の目的をp2へ圧制政府を転覆し真理自由を回復することとし、バスターール奪取と監獄長ダロニー・府知

事フレッツセル殺害を革命の結果として事実認定する。qは、発話の現在時から過去の事件を意味づける再帰的解釈を促す。ピロウは、ダロニー殺害は、「剛愎執拗」にバスチールを渡さなかったため「止むを得」なかったのだと言う。q以下は、²²の枠組をふまえたピロウの革命観²³。〈圧制政府官吏殺害は革命の目的ではない〉によって言説が織られている。²⁴から、平和的・穏健的な革命(r)が「吾儕の本意」として確認される。一方、フーロンを殺害する「今」の革命党は、道理の欠如したs「狂癪」に喩えられ否定評価が与えられる。府知事ベイリー・民兵大将ラフエツトラ有力者の指示に従うことを求めるtは、直接行動ではなく対話による問題解決を要請する一方で、有力者とそれ以外の者という地位・階層格差を作り出していくだろう。uは革命の名譽・価値の点から穏健的革命路線を訴え、既存の法制度と民主的な言論で裁判した上で処罰することを求める(v)。q・vは、従来のカミルデモランやピロウの言説が聴衆と作り出した、反革命勢力を直接的・暴力的に排除・消去するという革命の枠組を否定している。

ピロウの言説は、聞き手とは異なる自説を主張し革命党を対象化する「人々」と、聞き手との立場・思考・経緯の同一性を維持し革命党との一体化を前提とする「吾儕」によって織られている。「吾儕」は同一性を根拠に革命党・革命の原理・方針・立場を確認し、「人々」はそれに限定・変更を加え革命党の「狂癪」・「残忍」な行動を批判する。ただし、おのれの立場・原理・過去への再帰的解釈には、別の解釈も対置可能である。qを例に挙げよう。ダロニーを捕らえた場面では、ピロウは「彼れが命を助くべし」(41)と主張したが、ダロニーは府庁前に連行されて殺害された。その殺害を人々は「喜び合」(49)い、ピロウ自身「自づから心の中愉快を覚へ」ていた。かくて、qでの事実解釈は崩れる。さらに、説論観t・裁判観vは、権力を一部有力者にゆだねるものであり、人々が司法に直接関与できない点で従来の特権制体制下のモデルと変わらない。wでの革命党の反発は、イギリスの陰謀や群衆の興奮のためという語り手の説明があるが、これらのピロウの言説の立場や矛盾にも一因があると言えよう。もちろん、ベルチエを救わんとするピロウの言説は、革命への好意を維持させて参加・連帯・支持者層を拡大し、革命を発展させようとするメタメッセージをも担っている。しかし、言説のレトリックは、聞き手が付与した裏切り者の意味を外すことに失敗し、合意形成自体が挫折してしまう。このため、ピロウは革命に嫌悪感を抱いてしまう。革命党との合意形成の不発によって、革命運動の中で自己の占める位置・役割を見いだせなくなるのだ。

四 結末部の物語戦略

ベルチエー虐殺後、物語世界の語り手は、「嗚呼仏国の人民が斯る残忍凶暴の挙動を為しながら慣れ得て自づから怪しまず驚かざるに至りしは抑も誰れが罪なるか世の政權を握れるもの一時の私欲に掩はれて専制の威力を振り他年仏国民の狂戯の基ひを開」(93) いたと語る。物語世界の語り手は、私欲によって専制政治を行えば革命が過激化すると、内包された受け手である明治政府に警告する。だが、それでは革命が否定評価のまま読み手に受容されかねない。革命への否定的印象の解消に向けて、以後の叙述が進められていく。解消の戦略は、物語世界外レベルでの原因説明と、物語世界内のピロウの革命観転換にある。

まず、物語世界外レベルでは、革命の凶暴化を次のように説明する。「人民が年久しき虐政を悪むの余り知らず識らず」(95) 激化する傾向にあったが、イギリス宰相ピットは「其勢焰を煽動する種々様々の術数を用ひ禍乱の中に導き入る、を仏蘭西の人民は知らず識らず教唆され次第に凶暴過激の挙動」(96) に至った。これは、革命の惨状の原因は、革命自体の必然ではなく、弾圧や謀略にあることを含意し、物語世界外では革命自体への否定評価が解除される。

物語世界内レベルでは、ピロウは、ギルベルトの説得によって運動への参加継続を決意する。「故郷へ帰らん」(97) というピロウに、ギルベルトは革命が「汝達が忌み厭ふ斯る残忍の景況を現はしたる(略) 原由を明白に説き聞かせん」(97) と貴族と革命党との対立・抗争の間にイギリスが漁夫の利を得ようとしている証拠を提示する。ピロウは、「後々まで人に罵り悪まれんよりは」(98) と帰郷を望むが、ギルベルトは、「受取りし時分の如く為せし上子孫に譲るが吾儕の此の身に帯ぶる義務ならん況して吾儕男児に生れ如何に人々に罵られ悪まれたりとして良心の許す限り飽くまでも国家の爲めに心を尽すが当然」(98) だと言い、共にいたピトウに農夫ピロウの不安の種である「田園の耘耕取穫を世話」(99) するよう依頼する。ここで漸く、ピロウは革命継続への尽力を決意し、物語世界内でも革命の否定的評価は撤回される。革命参加への勧誘の言説戦略を見るならば、ギルベルトの言説は、ピロウの勧誘に否定的な発話や「当惑」(98)、断りに対して、その都度、断りの確定を先延ばしにする一方で、否定的発話への反論や断りへの批判をし、迂回的な誘導発話を行っている。合意形成を成功させるための継続的な説得、強い意志、言説の修辞、誠実な配慮こそがギルベルトの勧誘説得の特徴である。

さらに、ピトウには、ギルベルトは「真成の改革を政治の上に施すまで（略）性命を犠牲とするも事業を遂げ天下の安幸福を保つのを基を開くべき」(99)と言い、子供の世話を託しつつ、「他年必ず為すべきの時至らば国家の為め人民の為に働か給へ」(99)と述べている。革命激化の状況下で、家族と国家への「愛情」とその「幸福」を願う革命家としての自己像が提示される。一方では、次代における闘争がピトウに義務づけられ、言説を通じて革命の継続が伝えられていく。「自由の凱歌」は、「或る事情の掣肘する所と為」(宮崎夢柳「自由の凱歌」東雲新聞 一八八八・一〇・一四) っ九九回で中絶し、いかなる物語がその後展開したのかは、もはや知ることができない。しかし、現行テキストにおいては、革命への意志が様々な言説戦略によって示されていることも事実なのだ。

注

- (1) マイケル・モアマン「会話分析とともに」『文化を読む』人文書院一九九一・二) 三二一頁。
 (2) ドロシー・スミス「Kは精神病だ」『エスノメソドロジー』セリカ書房一九八七・四) 一一二頁。
 (3) 中山弘明「談話」の中の暴力」『日本近代文学』一九九四・一〇) は、島崎藤村「破戒」の言説分析を行ったが、氏は自由民権期を「演説の時代」と呼び、一九〇〇年代以降、日常会話の話し方が問題となる時代を「談話の時代」と呼んだ。
 (4) 林原純生「欧州奇事花柳春話」から「齋武名士経国美談」へ」『日本文学』一九八〇・一一) 七三頁。
 (5) 「自由の凱歌」の物語構造は、『復刻自由新聞』に欠号があり、拙稿「ヴァリアントとしての物語」『解釈』一九九五・九) では不十分な指摘しかできなかった。しかし、東大明治新聞雑誌文庫所蔵のマイクロフィルムで欠号を補うことで、六七回以外の全てを見ることができた。なお、三五・三六・八八回が重複しているため、実回数で表示した。また、山本芳明「漢詩文と政治小説」『国語と国文学』一九八四・一〇) で「不明」とした「訳語の妙」の翻訳例文の該当作が、「自由の凱歌」六八回であることが今回の調査で判明した。
 (6) 後掲の時間表は、日時、挿話、回、根拠に分けて記載した。日時欄では、一七〇〇年代の事項は下二桁で表示した。挿話欄は、「自由の凱歌」の出来事を時間順に配列した。回欄は、該当の実回数である。根拠欄は、判断の根拠となる本文を注記した。日時は、バスチール奪取前日の人民蜂起を、「同じ十四日の朝遂に猛烈なる挙動に及びし一伍一什は第十一回以下に記したる」(20) を根拠に七月十四日と決定し前後を確定した。その結果、ピトウの放校は一七八九年七月十日となる。とすれば、初出の「下旬」(1) ではなく、初版「仏蘭西革命記自由乃凱歌」(総入自由新聞社一八八二・一〇) (一) の「上旬」(1) が正しいことになる。「自由の凱歌」の物語世界内の時間は、七月十日から十八日までの九日間である。全九九回中、バスチール奪取当日七月十五日の叙述が五一回分を占める。
 (7) 山梨正明「発話行為」(大修館書店一九八六・七) 五頁参照。

- (8) 津田早苗『談話分析とコミュニケーション』(リール出版一九九四・四) 一一三頁参照。
- (9) テボラ・タネン『愛があるから……』だけでは伝わらない』講談社一九九五・九) 一〇一頁。
- (10) 長沢穂『自由の凱歌』より『鬼歌』へ』、『舞鶴工業高等学校紀要』一九七五・三) 二二七頁。
- (11) 発言態度の誠実と発言内容の道理の同一化が無効になる場合もある。ピロウは、フレゼルの虚偽的言説に単独では対抗できず、人々のドロニー、フーロン虐殺を制止できない。ギルベルトも、彼自身が『博学多才』(73) か否かをめぐる女王との論争では、「態」と「高慢」の「傍若無人」な態度をとる。ところで、誠実・道理を語るのは、革命党指導者に限らない。老婆マイルは、「真情」(87) を込めて、「驕奢」(86) の苛政が破れて逃亡するのは「卑怯」だと非難する。その「道理に責められ」、フーロンは反論できない。誠心と道理の結合の点でピロウ等とマイルは同一カテゴリーに属する。
- (12) 稲田雅洋『自由民権運動』(『岩波講座 日本歴史17』岩波書店一九九四・五) は、当時翻訳された演説マニュアルでは、「話し方にしても、できるだけ感情を抑えて理性的・論理的に議論を展開すべきである」というようなことが説かれている」(一〇〇頁) と指摘する。ただし、クワッケンボス『言語の用法』の翻訳『雄弁美辞法』の場合、それとは異なっている。
- (13) 安丸良夫『民衆運動における「近代」』、『民衆運動』岩波書店一九八九・一一) 四五九、四六一頁参照。
- (14) 安丸『明治10年代の民衆運動と近代日本』、『歴史学研究』一九九二・五) 一九頁参照。
- (15) 前掲稲田論文一〇三、四頁参照。
- (16) 『雄弁美辞法』の分類では、「設問法」。
- (17) この演説は、名称と実体との強固な結合を主張する。そこで、八二年版と八八年版の「記号」観の比較による、記号論的検討を拙稿「記号の物語」(『イミタチオ』一九九四・五)で行った。なお、この演説は、「繰り返す事」(『公会演説法』)即ち反復法と、記号構造と政治体制との「比喩法」・「比体」(『続公会演説法』)を用いて、王制廃止を聞き手に印象づけている。
- (18) ケネス・ライター『エスノメソドロジ』(新曜社一九八七・一〇) が掲げた、言説の意味は文脈に依存するが、同時にいかなる文脈も言説の中で存在するという「文脈状況再帰性」が、十分に機能しない事例といえよう。
- (19) 矢野龍溪『演説文章 組立法』(丸善一八八四・五) は、演説で避けるべき構成上の問題点として、「漸々徐々ニ真論点ヲ発露スル」こと、「数々複言ス」ること、「理由ヲ説カズシテ断言ヲ下スコト」、「過当ノ形様語ヲ多く用ユルコト」の四点を挙げている。ただし、この場合は、構成より、むしろ論理や状況面で合意形成失敗の原因があったと考えられる。
- (20) 馬場辰猪『内乱ノ害ハ革命家ノ過ニアラズ』(『自由新聞』一八八二・七・二二) 等、(『庄政ノ人民蜂起』)の図式は、松岡偉一『自由新聞』を読む(ユニテ一九九二・一一)によれば、自由民権運動全般を通してみられた。
- (21) ポリー・ザトラウスキー『日本語の談話の構造分析』(くろしお出版一九九三・五)によれば、現代日本語の日常的言語運用では勧誘への否定が示されると実質的な勧誘を進めない傾向が強く、「自由の凱歌」とは異なっている。

「自由の凱歌」時間表

日時	挿話	回	根拠
12 C	バスチール設置	21	五百余年(21)
17 C	バスチール監獄長、タロニー家世襲	21	百年以前(21)
40年代	タベルニエー、入獄	45	十年(45)
50年代	タベルニエー、バスチール幽囚	45	三十余年(45)
64?	ボルテイル死去	18	
73	ギルベルト、奥国ツリヤノン王宮で働く	74	千八百七十三年の頃(74)
74?	アンジピトウ、ハアモンド村に出生	2	
76? 77?	ギルベルト、アンドレーを強姦	50	年齒こそピトウの弟(3)
77	実権、路易第十六世から女王へ	18	
77? 78?	ギルベルト、セバスチアングルベルトをピトウの母に預ける	2	ピトウが漸く三四才(2)
78	カーザム候、演説後死去	95	千七百七十八年(95)
81? 82?	ギルベルト、再訪	2	三年の月日を過ぎ(2)
82	コントドソウーチ、入獄	43	千七百八十二年(43)
83	コントドソウーチ、バスチールへ	43	五年(45)
85	ギルベルト、国王へ建言	53	四年前(53)
86 A	ピトウ、母死去のため、エンヂエグリツクに預けられる	3	ピトウも今は早十二才(3)
86 B	ギルベルト、渡米、独立戦争支援	5、17	日を経て(5)
86夏	コントドソウーチの父死ぬ	43	二ヶ年(43)
88秋	ネッカー、入閣	18	千七百八十八年の秋(18)
89初	パリの人民不穏	19	千七百八十九年の初(19)
89初	ピトウ、学校寄宿舎に入る	5	ピトウが十五才(5) 以来半年ほどせん(5)
89・4	レベイヨン、虐殺	19	其年の四月(19)
89・5・4	国王等、ノヲツルダム行幸	19	五月の四日(19)
89・5・5	議事院(民族会議)	20	

語る現在						89・7・18	89・7・17	89・7・16		89・7・15	89・7・14	89・7・13	89・7・11	89・7・10	89・7・9	89・6・20
書き手の叙述	物語世界の未来	西の洋血潮の暴風執筆	物語世界の未来	物語世界内の現在	フリーロン、メイエルと再会し、革命党に捕まる。ピロウの演説。フリーロン、ベルチエー、人民に虐殺される。ギルベルト、ピロウを説得し、ピトウを田舎に帰す	フリーロン、メイエルと再会し、革命党に捕まる。ピロウの演説。フリーロン、ベルチエー、人民に虐殺される。ギルベルト、ピロウを説得し、ピトウを田舎に帰す	路易第十六世、パリ行幸。ギルベルト、ピロウと再会。サンジヤン、ライフと相談	女王、悪夢を見る。ギルベルト、女王と口論し路易第十六世にパリ行幸を進言。フリーロン、病死と偽り逃亡	起対策を練った後、チャニーと密会する	ピトウ、セバスタアンと再会。ピロウ等、ルーイラグラントで決起、府庁を経て、バスチールを攻略、ギルベルトを解放する。タロニー、フレツセル虐殺。ギルベルト、ドウスタイル宅で再会したネツカいの紹介で国王の侍医となり、アンドレーと対決する。女王、パリ蜂	朝、ピロウ等、グベルタン着。カミルデモルランら、革命党決起。ピロウ等参加、独人傭兵と交戦、仏常備隊と合流し撃退する	憲兵、ピロウ宅搜索。ピロウ、出発し、ピトウに合流	ネツカー、罷免	ピトウ、小学校放校処分のため、ピロウ宅に身を寄せる	ギルベルト、帰仏後、リーボルンで逮捕、バスチール入獄	人民、デユーグボオンに新議事院設置
						84 89	86 78 84、	84 85	70 78、	15 17、	11 14	8 10	11、 20	1、 6 7	16	20
誤訂正等	連載時の冒頭・末尾の言葉等	連載時の末尾の言葉・付言、正				昨夕(86)其暁の秋の風(85) 或る日の夕方(88)	昨日葬式を営み(86)	昨日(略)侍医の職を命ぜられし(72)監獄の陥りし翌日(84)	最早夜半に近ければ(69)	早鷄鳴暁(15)	昨夜(10)の朝(略)猛烈なる挙動(略)は第十一回(20)日脚も西に(12)今宵(14)	三日を過ぎし(7)	七月の十一日(20)	初版「七月上旬」	六日以前(16)	六月廿日(20)